

今日の説教のポイント <創世記3章8-19節>

①全てを見通しておられるはずの神様が、なぜアダムに、「どこにいるのか」と呼びかけられたのか？ここに神様の深い憐れみを見る。

昔、ここを読んで思ったこと。「神様は神様なのだから、アダムとエバのしたことも、今どこにいるのかも知っておられたはず。なのに、なぜアダムに“どこにいるのか”と呼びかけられたのか。ちょっと白々しいのでは」。しかし、そうではなかったのです。知っておられるのになお呼びかけて下さったことの意味を考えなくてはならないのです。呼びかけられるとは、相手が答えるのを待って下さっているということ。そして、彼、彼女に、自分たちがしたことについて語る機会を与えて下さったということ。それは、ここに至ってもなお神様が、罪を犯した人間がその罪の告白をなし、神様に立ち帰る機会を与えて下さったことなのです。ある人はこう言っています、「この物語の中に示されている神の恵みの深さは21節（神様がアダムとエバに皮の衣作って着せられた）だけに、すなわち判決の後にあるだけではない。神の恵みはまさに判決そのものの中に存在している」と。今日の箇所から、人間の犯した罪とそれに対する神様の罰だけ見て終わってはなりません。その背後にしっかりと存在している、神様の破格の憐れみの大きさを読み取りたいと思います。

②この話は私たちが、今、この神様に立ち帰ることが可能であること、神様がそれを求めておられるということを語りかけているのである。

アダムと女が他者に罪の責任をなすりつけようとする姿には、読んでいる私たちが恥ずかしくなります。しかし、そう思うのは、私たち自身の中にも同じような面があるからではないでしょうか。先週、「創世記3章の話は、人間が罪に堕ちた起源を問題にしているのではなく、罪人でない者は一人もいないということを行っているのだ」と言いました。しかし、「だから、人間が罪を犯すのはどうしようもないのだ」ということではありません。次の4章で、アベルを殺しかけているカインに神様は、「待ち伏せている罪に負けてはならない」という旨の助言を与えられています(4:4)。アダムやエバやカインを見た者は自分自身の罪の姿を思い、罪を悔い(回心し)、神様に立ち帰って生きることが求められているのです。罪は手強い。しかし、神様は御子イエス・キリストによって、私たちが神様に立ち帰ることのできるさらに恵み深い道をお与え下さいました。この憐れみに富み給う神様を信頼して歩む以上に確かな道が他にどこにあるのでしょうか！